

國學院大學学術情報リポジトリ

古代天皇祭祀の研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木村, 大樹, Kimura, Daiki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002478

令和2年度 博士（神道学）学位申請論文『古代天皇祭祀の研究』の要約

國學院大學大学院文学研究科 博士課程後期 平成27年度入学

木村 大樹

本学位申請論文（以下、本論文）の主たる目的は、古代の天皇祭祀について、その中核神事と考えられる神饌供進儀の次第・作法の詳細分析、また祭祀の構造、周辺諸祭儀との関連などの諸面から考察し、古代から現代まで続く神道史や神道祭祀の中での天皇祭祀の位置付けの一端を理解することである。

以下にその目次（章立て）を掲げる。

序文 本研究の目的・方法と構成	1
第1部 神饌供進儀の研究	
第1章 天皇祭祀の祭神	8
はじめに／1 天皇祭祀の祭神をめぐる議論／2 大嘗祭における天皇の御告文「祈請申詞」の検討／おわりに	
第2章 神今食の神饌供進儀と本義	26
はじめに／1 神饌供進儀の次第／2 神今食の本義をめぐって／おわりに	
第3章 大嘗祭の神饌	51
はじめに／1 大嘗祭神饌の全体構成／2 神今食・新嘗祭神饌との構造比較／3 個別の神饌の考察／結びにかえて	
第4章 神饌供進儀における「秘事」の継承	73
はじめに／1 神饌供進儀における次第・作法／2 神饌供進作法の画期／3 神饌供進作法の継承—上皇と習礼—／おわりに	
第2部 天皇祭祀の周辺	
第1章 天皇親祭をとりまく人々	108
はじめに／1 小斎人の卜定について／2 小斎人の神事供奉の内容について／3 神今食の空間的構造／おわりに	
第2章 神今食の祭儀体系への一試論	134
はじめに／1 日程からの考察／2 祭儀体系からの考察／おわりに	
第3章 御体御卜の成立と変遷	161
はじめに／1 御体御卜の文書処理について／2 御体御卜の成立時期の検討／3 御体御卜の対象と内容／4 御体御卜の変遷／おわりに	
補論 御体御卜奏上儀の復元的考察	183
はじめに／1 御体御卜奏上儀諸場面の考察／2 その後の変遷／おわりに	

第4章 天皇と斎王の祭祀構造	197
はじめに／1 『延喜式』にみる「戸座」／2 『類聚三代格』にみる「戸座」／3 天皇祭祀と斎王祭祀の比較—供膳儀礼を中心に—／おわりに	
附論 『延喜式』にみる聖体安穩祭祀	219
はじめに／1 聖体安穩祭祀の主体／2 聖体安穩祭祀の客体／おわりに	
第5章 大嘗祭の場と天皇祭祀の構造	235
はじめに／1 天皇祭祀の「場」／2 大嘗祭と神今食・新嘗祭／おわりに	
補論 班幣行事の復元的考察	257
はじめに／1 『儀式』『延喜式』からみる祈年祭の次第／2 祈年祭次第の変遷／ 3 宮内庁書陵部蔵『月次祭神祇官指図』にみる班幣／おわりに	
結語 古代天皇祭祀の構造理解への展望	281
附録 天皇祭祀関係史料翻刻	
解説・凡例／〔翻刻1〕宮内庁書陵部蔵『神今食次第』／〔翻刻2〕宮内庁書陵部蔵『大 嘗会次第』（法性寺殿御次第）	

なお、本論文は、「國學院大學課程博士論文出版助成金」の交付を受け、令和3年12月（ただし、奥付の発行日は令和4年1月）に吉川弘文館より同題にて刊行した（ISBN 9784642046657、<http://www.yoshikawa-k.co.jp/book/b594875.html>）。本書の論旨・内容は、本論文と変わらないものであるが、刊行にあたって一部表現や構成などを加筆及び改訂・増補している。そのため、詳細についてはこちらを、適宜ご参照いただきたい。

序文 本研究の目的・方法と構成

序文では、本論文全体の主旨・目的を掲げ、各章の概要を述べた。また本論文の各部各章で用いる学術用語・分析概念としての「天皇祭祀」の位置付けを、天皇自身が祈願者・祭祀者となって自ら神饌を供進する神事を行う祭祀（具体的には大嘗祭・新嘗祭・神今食）であると定義付けている。

第1部 神饌供進儀の研究

第一部では、天皇祭祀の中核である天皇による神饌供進儀について、祭神、神饌供進次第・作法、神饌、そして秘儀の継承という各面から詳細に論じた。

第1章「天皇祭祀の祭神」（新稿）では、大嘗祭を中心とする天皇祭祀の祭神について考察した。まず、大嘗祭祭神論の各説を①天照大神祭神説、②天照大神＋天神地祇祭神説、③悠紀・主基両殿別神説、④御膳八神祭神説、⑤稲魂その他祭神説に分類して再整理した。これにより、少なくとも天武朝以降の天照大神ただ一神であること、それ以前については史料制約上不明瞭ながら、天皇祭祀の第一義が祖先祭祀である点は一貫し、それに関連した複数

の祭神説が、祭神天照大神の確立期における神名・神格の変容とそれに伴う神話の複雑化という現象に起因また収斂する可能性があることを挙げた。以降の各章での考察は、基本的に本章で定義づけした天皇祭祀の祭神＝天照大神という理解を前提として進めるものである。また、大嘗祭において天皇が読み上げた「御告文」について、令和元年に宮内庁が公開した複数の例を比較し、その内容を精査した。これにより、現在の政府公式見解となっている大嘗祭の祭神「皇祖及び天神地祇」について、天照大神（皇祖）とともに挙げられる「天神地祇」とは、天皇が神饌を供進する対象としての狭義の「祭神」には該当せず、天皇の治世や玉体安穩に守護・擁護を与えてくれるような存在であって、また広い祈りの対象のような存在であることを示した。

続く第2章「**神今食の神饌供進儀と本義**」（初出「神今食の神饌供進儀に関する一考察」〈『神道研究集録』31、平成29年〉）では、まず九条家本『神今食次第』（宮内庁書陵部蔵）所引の『内裏式』『清涼御記』両逸文の比較をもとに、平安時代前中期の神饌供進儀の次第・作法について詳細に考察した。これにより、1度の神饌供進儀における天皇（采女の作法も含む）の御箸を動かす作法の回数を算出することで、神今食では252回、新嘗祭と大嘗祭はその倍の計504回であったことを明らかにし、神事全体の中で相当な時間と神経・労力を要したであろうことを考察した。また、天皇祭祀の本義に関する先行研究の論争を整理し、中央の寢座に天皇が臥し何らかの所作を行うという、いわゆる寢座秘儀説が成り立たず、天皇はあくまで寢座の東の御座において神饌供進の親供作法に専念していたことを再確認した。これは『神今食次第』の両逸文の記述からも補強でき、神饌供進（及び御告文の祈請と拝礼）以外の作法を行うことはなかったことも整合性が採れるところである。

第3章「**大嘗祭の神饌**」（初出「大嘗祭の神饌に関する一考察」〈『神道史研究』67-2、令和元年〉）では、まず鎌倉期の史料にみられる大嘗祭神饌の品目を『延喜式』における天皇祭祀の神饌構成と比較することで、これが遅くとも平安時代中期にまで遡り、さらに遡れば纏向遺跡における3世紀中頃の祭祀土坑から出土した遺物の食物構成により、この段階に構成の淵源を見出しうることを明らかにした。また、大嘗祭神饌の調達過程などの形式的な面について考察を行い、大嘗祭は悠紀・主基の斎国が中心的に関与していたのに対して、神今食・新嘗祭では神祇官が多分に関与・介在していたことを確認した。さらに米と粟の御飯、汁漬と羹の関係、粥について個別に考察し、天皇祭祀の神饌を作法の形式の違いにより、①天皇みずからが御箸を執って枚手に盛り共食も行う神饌（御飯・御酒）、②天皇みずからが盛るが共食は行わない神饌（鮮物・干物・菓子）、そして③天皇が盛ることも共食することもしない神饌（汁漬・羹・粥）の3つに分類できることを示した。

最後の第4章「**神饌供進儀における「秘事」の継承**」（初出「大嘗祭の神饌供進儀における「秘事」の継承」〈『神道宗教』254・255、令和元年〉）では、神饌供進の作法という「秘儀」が、歴代天皇の間でいかに継承されていたか、院政期以降の史料をもとに考察した。まず、鎌倉時代における大嘗祭の全体的かつ詳細な神饌供進作法を知ることができる、『建保大祀神饌記』および『伏見院宸記』の次第・作法を詳細に分析し、これを第2章の『内裏式』『清

涼御記』逸文にみえる記述と比較した。両者の違いのうち特に顕著なものが、「二行」と「五出」と呼ばれる、神饌供進の際の並べ方について記されている点であり、これらの作法の確立やそのテキスト化の画期に、院政最初期における白河上皇の存在が大きく関与し、後に「秘事」として継承される下地があったであろうことを、当時の時代背景や白河上皇の境遇・個性などの面から考察した。また、秘儀継承の場としての「習礼」について、院政期の十数代の記録を挙げて分析し、習礼を構成する重要な要員として天皇祭祀経験者である上皇が存在していたこと、さらに天皇が10歳未満か以上か、成人であるかによって習礼の主催や形式に差があることなどの特徴を確認した。

第2部 天皇祭祀の周辺

第2部では、第1部で詳細緻密に分析した天皇親祭の周辺・外部において、これを支えた人々の供奉、前後の付属祭祀（予備祭祀）による祭儀の体系、また天皇以外の祭祀や行事が、どのような構造で行われたのかを考察した。特に前半（第1～3章）では天皇祭祀の祭儀体系と御体御トとの関係、後半（第4～5章）では天皇祭祀と中宮・東宮・斎王の祭祀との関係について重点的に扱った。

はじめに第1章「**天皇親祭をとりまく人々**」（初出同題〈『神道史研究』66-1、平成31年〉）では、神今食・新嘗祭に供奉した「小斎人」の構造について、卜定方法や供奉・関与の度合いに差異がみられることを考察した。これにより、親祭を行う天皇をとりまく人々は、その供奉の関与度が高い（距離的にも近い）順に、神饌供進の介添えをする陪膳采女→采女を中心とする神饌行立の人々→宮内省とその関係・被官官司、及び後宮の女官→太政官や中務省とその関係・被官官司、という構造を呈していたことを明らかにした。そして、このような差異を天皇の次第・動きと連動させて考えると、これが祭祀の場である中和院内における参入可能区域の違い（神殿〈神嘉殿の母屋中央三間〉→神嘉殿→神嘉殿の付属舎〈幔で区画された東舎・西舎など〉→中門→中和門）として、空間的・視覚的に表出していることを、図も用いて明らかにした。

第2章「**神今食の祭儀体系への一試論**」（初出「神今食を中心とした祭儀体系への一試論」〈『神道宗教』243、平成28年〉）では、天皇親祭の前後に行われる諸祭儀からなる祭儀体系について考察した。特に、神今食の祭儀体系の枠組みの中にあって、御体御トが天皇の祭祀適合性を予備的に判断したとする先行研究の見解を整理し、これに疑義を呈すことを試みている。具体的には、まず日程の面から考察し、御体御トが穢れなどの要因により式日を延引した際に、神今食より後に行われたイレギュラーな事例が散見できることを提示した。また、他の祭儀（特に忌火御飯・御贖祭・大殿祭・小斎人卜定）の性格を分析することで、これらが天皇祭祀と密接な関係を有していることを再確認し、翻って御体御トにはそのような性格が見られないことを強調することで、御体御トが円滑・整然と組み込まれた祭儀体系の中には組み込むべきでないことを提示した。

続く第3章「**御体御トの成立と変遷**」（初出「御体御トの成立と変遷に関する一考察」〈『國

學院大學大学院紀要一文学研究科一』47、平成28年))では、第二章で扱った御体御卜について中心的に扱い、その成立時期と変遷について考察した。まず御体御卜の結果の奏上以後に取り交わされた公文書の内容を分析することで、御体御卜には、1年に2度、半年ごとに行うという周期性、また天皇の玉体への不安を事前に占い奏上するという予見性という大原則があったことを明らかにした。また、このような原則に従って記録を整理することで御体御卜の成立時期を検討し、七世紀後半の数代の天皇(斉明天皇・孝徳天皇・天智天皇・天武天皇)が相次いで神の祟りにより崩御したと類推されることから、持統天皇朝頃に神祟りを周期的に予見する祭儀として成立したであろうことを論じた。さらに、御体御卜が対象とする卜占の内容を、実際の奏上文の精査やその後の変遷から考察した。これは第二章での先行研究への疑義を受けるものでもあり、御体御卜が神今食の付属祭儀(予備祭儀)ではなく、天皇の身体の平安を介した世界(天下)全体の平安を見通す大規模な理念を持った祭儀であったことを考察した。なお、本章の末尾では、第2・3章の考察の前提となった岡田莊司氏の「循環型祭祀体系」の理論について挙げ、これに対する反論への私見について附記した。

第4章「**天皇と斎王の祭祀構造**」(初出同題『神道研究集録』32、平成30年))では、天皇祭祀と関連して行われた伊勢斎王の祭祀、及び天皇祭祀への中宮・東宮の関与について考察した。その分析手法として、神祇官に所属した「戸座」という存在に焦点を当てている。まず、先行研究による「戸座」理解を整理し、続いて『延喜式』と『類聚三代格』にみる規程・記述から、その任用と解任、職能、また待遇などについて考察した。これにより、戸座は天皇・皇后・斎王に付属し東宮に付属しないこと、また付属対象が祭祀(親祭)に関与する際に欠かせない「忌火」に関する職掌を有していたであろうことを明らかにした。また、そこから発展して、天皇祭祀と中宮・東宮・斎王との関係について比較・分析することで、戸座の付属する中宮は天皇祭祀を何らかの形で補助し、斎王は自ら伊勢において天皇祭祀を補完する斎王新嘗祭を行ったと考えられること。一方、戸座が付属しないと考えられる東宮には、神今食・新嘗祭への関与、及び東宮独自の神今食・新嘗祭がなかったであろうことを考察した。なお、斎王が神宮三節祭の前日に離宮院にて行った「供膳」についても考察し、これは天皇祭祀の延長線上としての斎王祭祀ではなく、むしろ斎王の関与する神宮祭祀としての側面が強かったであろうことを提示した。

また第4章には、その結論を補強する附論「『**延喜式**』にみる**聖体安穩祭祀**」(新稿。ただし、その後同題にて『國學院大學研究開発推進機構紀要』13、令和3年に掲載)を付し、天皇・中宮・東宮・斎王の身体(聖体)に対して行われた聖体安穩祭祀について考察した。ここでは、宮主・御巫・戸座といった聖体安穩祭祀の主体が、それぞれいづれの対象(聖体)に付属したのか、また各祭祀(御体御卜・大殿祭・御贖・御巫奉斎神祭・鎮魂祭・忌火庭火祭など)がどの聖体を対象として行われたのかについて、細かい差異にも注目して分析した。また、これらの祭祀を周期(1ヶ月・半年・1年・1代)によって分類・整理し直し、各祭祀の特徴を挙げ、また中宮が天皇とともに「内裏」を構成する存在であったこと、斎王は斎宮という「ミニチュアの国家」において天皇の祭祀体系を補完したこと、東宮は天皇祭祀の

枠外にあって次代の天皇として控えるべき存在であったことを考察した。

そして第5章「**大嘗祭の場と天皇祭祀の構造**」(初出「大嘗祭の場と祭祀構造」〈『國學院雜誌』120-11、令和元年〉)では、前半において天皇祭祀の行われる「場」(大嘗祭一斎郡稻実殿院・北野斎場・大嘗宮、神今食・新嘗祭一神嘉殿)の問題に焦点を当て、大嘗祭と神今食・新嘗祭における関連殿舎の機能面から対応関係などを探ることで比較を行った。これにより、大嘗祭が一代に一度、天照大神に「衣食住」を新調して天皇が丁重に遥拝する性格に重点が置かれた一方、神今食・新嘗祭は恒常の祭祀施設である神嘉殿において、毎年定期的に神饌を供える性格こそが重視されていたことを明らかにした。また、このような天皇祭祀の場を大内裏の中心軸上(神嘉殿一大内裏中央の中和院、大嘗宮一中和院南の朝堂院に建設)に配置する構想が、平安京造営時には遡る可能性を提示した。また後半では、本論文の各部各章で考察してきたことを踏まえ、神今食と新嘗祭の性格の違いを暦法サイクルと農耕サイクルの差異の面から、また大嘗祭と新嘗祭の性格の違いを恒例性と臨時性の差異の面から、それぞれまとめた。

なお第2部には、自身の研究のサブテーマとして設けている「古代祭祀・儀式の復元的考察」に関する論考二編を、関連する第3章と第5章の後に補論として付した。前者「**御体御ト奏上儀の復元的考察**」(初出同題〈『延喜式研究』30、平成27年〉)では紫宸殿における御体御ト奏上儀について分析し、併せて作製(撮影)した復元映像の写真とともに示した。また後者「**班幣行事の復元的考察**」(初出同題〈『國學院大學大学院紀要一文学研究科一』49、平成30年〉)では、天皇祭祀を二重構造の基盤・前提としたと考えられている国家祭祀の祈年祭における班幣行事について、図やイラストを用いて視覚的な理解ができるよう考察した。いずれも、今後の新たな研究分野としての確立を企図したものである。

結語 古代天皇祭祀の構造理解への展望

結語では、本論では中心的に扱うことのできなかった祭祀の二重構造論の問題について取り上げ、単に中央の天皇祭祀・国家祭祀と神社・周辺の地域祭祀・氏族祭祀だけが二重構造になっていただけでなく、中央においても同様に天皇祭祀と国家祭祀が二重構造の関係にあったことを重視し、今後の自身の研究における展望として締め括り論じた。

また本論文の巻末には、天皇祭祀に関する貴重史料である、宮内庁書陵部蔵の九条家旧蔵史料の『神今食次第』と『大嘗会次第』について、解説と翻刻を付した(いずれも新稿)。ただし、本附録については、紙幅の都合により、いずれも上記の拙著『古代天皇祭祀の研究』には掲載していない。そのため、体裁を整えて今後いずれかの媒体にて発表・掲載を急ぎたいと考えているところである(令和4年1月現在)。